

挨拶

—国際日本学専攻の発足に思う—

お茶の水女子大学長 佐藤 保

私は日本学ではなく中国学、特に中国の古典文学を専門としています。ご存じのように、中国の古典文学は日本文学と歴史的に密接な関係をもっておりまして、いわゆる国際日本学の研究と無関係ではございません。従いまして、今回のシンポジウムには大きな関心を抱いておりました。

ここで今回のシンポジウムを開く発端となりました大学院の国際日本学専攻の設置に至る経緯について、説明させていただきます。

本学の大学院は人間文化研究科と申しまして、学部学科の上に置かれた直結型の大学院ではなく、学部とは切り離された独立大学院として設置されているものです。人間文化研究科は昭和51年（1976）にまったく新しいタイプの大学院として設置されましたが、発足の当初は比較文化学専攻と人間発達学専攻の2専攻しかなく、しかも博士課程3年の研究科としてスタートしました。学生定員も大変少なく、比較文化学専攻15名、人間発達学専攻10名の合計25名の定員しかありませんでした。最初の学生募集はごく短い期間に行われたにも拘わらず、お茶の水女子大学における博士課程の設置を待ち望んでいた本学の卒業生や他大学出身者など、確か80名前後の多数の応募者がありました。その中から厳選して、第1期生は13名で発足しました。その第1期生の皆さんは、発足から23年たった現在、それぞれ学界や企業などの第一線で活躍中であります。その後、翌年の昭和52年（1977）には人間環境学専攻が増設されて3専攻となり、しばらくその状態が続きました。

人間文化研究科が大幅に改組されたのは、平成9年（1997）のことです。それまで各学部の上に置かれていた大学院修士課程をすべて人間文化研究科に取り込んで、人間文化研究科博士課程の前期課程（修士課程）6専攻に改組したわけです。それに伴いまして、既設の修士課程の人文科学・理学・家政学の3研究科は廃止されることになりました。また、同時に後期課程（博士課程）にはあらたに複合領域科学専攻が新設され、後期課程は4専攻に増えました。すなわち、人間文化研究科は後期4専攻、前期6専攻の5年制の大学院として生まれ変わったのです。さらに複合領域科学専攻の基幹講座に初めて教授・助教授の専任教官が配置されることになりました。それまでは専任として助手しかいなかったのです。改組はその後も継続し、昨年の平成10年（1998）には後期課程の人間発達学専攻と人間環境学専攻がそれぞれ人間発達科学専攻、人間環境科学専攻に改組され、両専攻とも基幹講座に専任の教授・助教授が配置されました。

そして今年度、平成11年（1999）に比較文化学専攻を比較社会文化学専攻と国際日本学専攻の2つの専攻に改組して、後期課程は合計5専攻となりました。これで大学院人間文化研究科は、博士課程後期5専攻、同前期6専攻がそろい、すべての後期専攻に専任の教授・助教授が配置されることになりました。現在、人間文化研究科の専任教員数は助手を含めると51名に上ります。学生定員も前期課程が1学年196名、後期課程が同じく73名と大幅に増加しました。これで私たちの計画した大学院の改組が、ようやく一応の完成に到達したと申せます。

本学はこのような過程で大学院の整備充実に努力を重ねてまいりましたが、今年度国際日本学専攻があらたに発足したのを記念して、ぜひこの機会に新専攻の発足を国内外に明らかにすると同時に、国際日本学研究の今後の糧とするために企画されたのが、今回のシンポジウムであります。

また、今回のシンポジウムの開催に、本学の先生方のご尽力はもちろん、事務職員、それに学生諸君の献身的な協力があったことを私は大変感謝しています。とりわけ学生諸君について言えば、従来、学会その他いろいろの催しが開かれたときにはそれぞれの学部や学科の学生が協力するというのが一般的ですが、この大学院が大学全体の学部学科の枠を超えた学際的な研究科であることを反映して、今回のシンポジウムには実に幅広い全学の学生諸君が手伝ってくれました。この意味からもこのシンポジウムは画期的な催しであったと思います。皆さんに心からお礼を申し上げます。

さて新しい国際日本学専攻の講座内容ですが、この専攻は総合日本学・日本分析論・応用日本言語論という3講座から構成されています。シンポジウムもおおよそこの3部門に分けて行われ、大変活発な議論が交わされたと聞いています。

ところで先程、私の専門は国際日本学と関係が深いと申しましたが、私の関心をもっておりますテーマの一つに、明治維新が行われて新政府が発足して間もないころ、中国、つまり当時の清朝から派遣されてきた最初の外交団のことがあります。清国外交団の来日は明治10年（1877）のことでした。彼らにとって、維新を行って近代化に踏み出した日本の姿はまことに興味深いものでした。未だに前近代の国から来た彼らは熱心に日本の諸制度を調査研究して、数種の書物にまとめていますが、新しい教育制度の改革も重要な関心事でした。当時、日本は明治の改革を行った人たちが、これからの日本の教育をどうするか大論争をしていた時期です。国学派、漢学派、洋学派の人々が、できたばかりの文部省の指導権を取ろうと、侃々諤々の議論を重ねていました。国学派か漢学派かというのは、要するに国家神道の立場をとるか、儒教倫理で教育を行うかという論争であり、洋学派は福沢諭吉等を代表として、進んだ西欧の教育体系に沿った教育をすべきだと主張するものでした。私は教育の専門家ではありませんが、私なりに整理してみますと、結局、最後は漢学派が勝利を収めたように思います。もちろん、単純な漢

学教育のみではなくて、そこには国学的要素も洋学的内容も加味されたものではありましたが、後に教育勅語に連なって行くように、儒教倫理を根幹とする教育が国家の方針として採用されたように思います。しかし、この過程は複雑です。例えば、私どものお茶の水女子大学の前身の東京女子師範学校の初代校長（摂理）を務めた中村正直（号は敬宇）は、英国に留学して『西国立志編』『自助論』等を著すなど、ふつうは洋学派の啓蒙思想家と目される人物ですが、東京女子師範学校の校長をやめた後、東京大学の教授になり、そこでは漢学を教えています。つまり、漢学派といい、洋学派といい、あるいは国学派といっても大変微妙な関係にあるわけですし、ある人物を一つの派閥だけに分類することは大変困難です。ただ、その後の大勢からみて、漢学派の勝利と言えるのではないかと私は考えています。教育勅語などは正にその証拠です。ともかく、日本はこのような精神風土、精神構造をもつ国ですから、日本学というのも一筋縄では行かない、なかなか複雑な学問であると私は感じています。つまるところ、このような複雑な事柄を分析し総合することによって、はじめて日本学が成立するのでしょう。

今回のシンポジウムに際しまして、私は以上のようなことをあれこれ考えています。

皆様も、どうぞこのシンポジウムを通して、日本学とは何かをお考えいただき、今後ますます日本学の研究を深めてくださるようお願いして、挨拶といたします。